様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ５ 月 ３０ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ１６４８９

研究課題名（和文）構造的類縁プログラムを基軸とした野外教育プログラムの教育・治療構造の検討

研究課題名（英文）Educational and Therapeutic Structural Aspect of Outdoor Educational programs

研究代表者
渡邉　仁（WATANABE, Hitoshi）

筑波大学・体育系・助教

研究者番号：７０３７５４７６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：　野外教育に関する研究は、場（状況）や個別性を考慮した質的アプローチと共に、教育･治療的構造の理論的検討が課題である。本研究の目的は、野外教育プログラムを実践し、自己成長の効果に対する定量的及び定性的検討を蓄積しつつ、そのプログラムの構造を理論的に定位する。
　本研究の成果は、その有効性のエビデンスの蓄積となった。また、野外教育プログラムは、否定的な認識を生成する者も少なからず存在していた。指導者は、個別性を十分に理解し総合的に判断しながら、指導することが求められる。さらに、その教育･治療的構造について、機能的類縁プログラムを基軸に比較検討を行い、その特徴を浮かび上がらせた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　研究成果の学術的意義や社会的意義は、まずは何より、我が国の青少年教育としての野外教育プログラム実践に関して、その後押しとなるエビデンスの蓄積となったことであろう。また、野外教育プログラムの個別性への影響の違いを明らかにし、個々の特性等に配慮した指導の重要性を指摘し、このような質的アプローチの研究の重要性を示したことである。さらに、野外教育プログラムの教育･治療的構造について、機能的類縁プログラムの比較検討から理論的な整理を行い、「野外教育の全体像」を解明する一つの布石となったことである。

研究成果の概要（英文）：This study concerned educational and therapeutic structural aspect of outdoor educational programs. The sub-purpose of this study was to carry out the organized camp etc. and to investigate effects on the self-enhancement of the participants.
The following results were obtained: 1) The self-enhancement of participants showed the significant progress. 2) According to qualitative analysis, most of participants were able to give positive meaning to their experience but a few of them recognized negative feel for their experience. 3) Regarding educational and therapeutic structural aspect of outdoor educational programs, the feature was organized by compared with functional relative programs.

研究分野：野外教育

キーワード：野外教育　自然体験活動　構造　冒険教育プログラム　組織キャンプ

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

近年の野外教育プログラムに関する研究は、実証研究の蓄積はもとより、場（状況）や個別性を考慮した質的アプローチが注目されている。同時に、野外教育プログラムの教育･治療的構造が理論的に定位されることが期待されている。本研究では、他領域の教育・治療的アプローチとの比較検討することで、経験的あるいは断片的に語られていた野外教育プログラムの有用を、理論的に説明することを可能にする。その結果、野外教育プログラムの実践普及に対する大きな推進力となる可能性があるだろう。

２．研究の目的

本研究は、児童期から青年期を対象に野外教育プログラムを実践し、自己成長に対する効果に対する定量的及び定性的検討を蓄積しつつ、そのプログラムの構造を理論的に定位することを目的とする。具体的には、(1)野外教育プログラムによるクライエントの自己成長効果を量的に検証し、(2)野外教育プログラムによるクライエントの個別性への影響を質的に検討し、(3)野外教育プログラムの教育･治療的構造について､機能的類縁プログラムを基軸に理論的に検討する。

３．研究の方法

(1)種々の野外教育プログラム（2 泊 3 日大学生雪上、3 泊 4 日児童キャンプ、ほか）を実践し、自己成長（信頼感、自然体験効果等）の変容を量的に検証する。

(2)野外教育プログラム（雪上プログラム）を体験した大学サッカー部員に対して、約１年後に半構造化面接を行い、質的な変容を検討する。

(3)野外教育プログラムの基準関連となる「(一般的な）カウンセリング」「エンカウンターグループ」「作業療法」「環境療法」を、機能的類縁プログラムとして操作的に位置づけて、その教育・治療構造の特徴を理論的に比較検討する。

４．研究成果

(1)A 大学サッカー部の選手 35 名を対象に、2019 年 2 月に野外雪上プログラム（2 泊 3 日：内容スノーシューハイキング、雪上テント泊）を実践し、信頼感（天貝 1995）およびスポーツ集合的効力感（内田ら 2014）を前後に測定した。その結果、変化は認められなかった。

また、小学生低学年（1～3 年生）の 34 名を対象に、2018 年 8 月に組織キャンプ（3 泊 4 日：環境整備、アイスブレイキングゲーム、野外炊事、沢遊び、登山、キャンプファイヤー、クラフトづくり等）を実践し、幼児用自然体験活動効果測定尺度（4 因子：社会性、自然理解、積極性、自然適応）を前後に測定した。t 検定の結果、自然理解（$t=5.92$, $p<.01$）、積極性（$t=3.11$, $p<.01$）、自然適応（$t=2.97$, $p<.01$）の３因子に向上が認められた。

さらに、東北地方の高校生 96 名を対象に、2019 年 7 月に富士山登山プログラム（2 泊 3 日）を実施し、状態自尊感情（阿部ら 2005）等を前後に測定した。性別と測定時期の二要因分散分析（2×2）を行なった結果、性別（$F=5.36$, $p<.05$）に有意差があり、測定時期（$F=19.08$, $p<.01$）に有意な向上が認められた。

(2)野外教育プログラム（2016 年 2 月実施：2 泊 3 日雪上プログラム）を体験した大学サッカー部の選手 11 名に対して、約１年後に半構造化面接を行い、チームビルディングを分析視点として、SCAT 分析を用いて体験の個別性への影響について行なった。その結果、特に過酷な条件から生まれる危機管理意識と緊張感がチーム機能促進に影響し、チームという仕組みを意識できる社会化につながったと考えられる。しかし、すべての参加選手がその影響を自覚しているわけではなく、少数は否定的に捉えていた。

(3)野外教育プログラムの基準関連となる「(一般的な）カウンセリング」「エンカウンターグループ」「作業療法」「環境療法」を、機能的類縁プログラムとして操作的に位置付けて、その教育・治療構造の特徴を比較検討した。具体的には、外的な構造として「空間・時間・学習者・指導者・体制」等について、内的な構造として「学習者と指導者の関係性、指導者の主要な姿勢、体験の意味合い」について、差異や共通性を明らかにした（表 1.～ 2.）。

(4)本研究の成果は、野外教育プログラムの有効性に関して、実践を後押しするエビデンスの蓄積となった。また、野外教育プログラムは多くの参加者に有用なものであるが、否定的な認識を生成する参加者も少なからず存在していた。指導者は、発達や認識の個別性を十分に理解し、個人の特性、環境の変化、グループダイナミクスの影響などを総合的に判断しながら、指導することが求められるだろう。さらに、野外教育プログラムの教育･治療的構造について、機能的類縁プログラムを基軸に比較検討を行い、その特徴を浮かび上がらせた。この比較整理が、「野外教育の全体像」を解明する一つの布石となることが期待される。

表1. 教育・治療構造の比較表A

大区分	中区分	小区分	カウンセリング	エンカウンターグループ	野外教育プログラム
概要			依頼者の抱える悩みや問題に対して、訓練を受けた相談者が、その専門知識や技術を用いながら、心理的な相談支援をしていくこと。広義の意味では、心理療法（精神療法、サイコセラピー）なども含む。	村山によると、エンカウンターグループという用語は、①人間回復運動、②集中的グループ体験、③ベーシック・エンカウンター・グループ、の3つの意味で用いられている（臨床心理大辞典）。以下、一般的かつ基本的なエンカウンターグループを想定して取り上げていく。	野外活動を用いた教育プログラムである。「野外教育は、野外における（in）、野外についての（about）、野外のための（for）教育である」（Donaldson1958）が代表的な定義といえるだろう。以下、身近な具体例として「組織キャンプ」を取り上げていく。
外的な構造	空間	実施場所	会話ができる小部屋（面接室）	利用ルールや規制が厳しくない施設（セミナーハウス）などで、集団で会話やワークショップができる空間（部屋）がある場所。	青少年教育施設やキャンプ場など、自然環境が豊かな場所やそこに容易にアクセスできる場所。
		室内/屋外	室内	主に室内	主に屋外
		日常生活からの物理的距離	不問	離れていることが多い	離れている
	時間	長さ	60～120分程度	合宿形式が多く、1～4泊程度で実施される（1セッション3時間、1日3セッション程度）	日帰り形式～数週間の合宿形式
		時期	不問	不問（ただし、長期の場合は、その時間を確保しやすい時期）	夏が多い（夏季休業）
		頻度（回数）	複数回	一回性	一回性
	学習者[1]	呼称	クライエントなど	参加者など	キャンパー、参加者など
		年齢	言語が使える年齢以上（小学生以上）	青年以上	幼児から大学生（あまり成人を対象にはしない）
		グループサイズ	― （個人）	10～12名前後	6～8名前後
		メンバー構成	― （個人）	各グループが、年齢、性別、職業、生い立ち等の多様性（異質）が確保されるように編成する。	一般的に、各グループが、男女混合、近い年齢（例えば、小学低学年、小学高学年、中学生、高校生、大学生などの、学校区分を目安とする場合が多い）になるように編成する。
	指導者[2]	呼称	カウンセラー、臨床心理士、セラピストなど	ファシリテーター	キャンプリーダー、キャンプカウンセラーなど
		年齢	成人以上	成人以上	高校生から青年
		経験値とトレーニング	実践経験と関連する学問的な理解を積んでいる（積み続けている）必要がある。	実践なトレーニングが積まれている必要がある。	自然環境、対象となる学習者への興味関心があることが前提（実践経験と関連する学問的な理解があることが望ましい）。
	体制		カウンセラーとクライエントは、1対1の関係。ただし、カウンセラーは、同僚や上級指導者よりスーパーバイズを受ける。	1グループに対して、1～2人のファシリテーターが担当する（いわゆるグループカウンセリングの形式）。ただし、ファシリテーターは、一般的には、同僚や上級指導者よりスーパーバイズを受ける。	1グループに対して、1人のキャンプリーダーが担当する（いわゆるグループカウンセリングの形式）。ただし、上級指導者（キャンプディレクター）等が、適宜、専門的な助言を行なっている。
	学習者が負担する費用		カウンセリング自体に対する費用は、一般的に有料である。	プログラムを実施するための実費が必要であり、その他の費用に関しても基本的には有料。	プログラムを実施するための実費が必要。その他の費用に関して、基本的に有料であるが安価な場合もある（公益性の高い団体が主催する場合など）。
内的な構造	学習者[1]－指導者[2]の関係性		対等な関係	対等な関係（仲間的）	状況に応じて、指示的関係と対等関係が顕在化する。
	指導者[2]の主要な姿勢		クライエントの語りに傾聴（ロジャーズの3原則など）が前提。	グループやメンバー自体の潜在的な可能性に対する信念や、ロジャーズの3原則が前提。	自然環境の脅威や物理的危険に対する指導・教育が大前提。と同時に、個人やグループの語りへの傾聴を心がけ、それらの潜在的な可能性を感じている。
	「体験」の意味合い		クライエントの日常の体験や思いの語りを傾聴する中で、面接室で起こってくる体験（共時性など）に対しても意味を問う。主訴の解決だけでなく、自己の深層部に触れ、パーソナリティの変容に迫っていくこともある。	「今、ここ」で起きていること（体験）に対して、グループメンバーと共に、真摯に受け止め、受け入れていくものとしている。人との出会いだったり、真実の自分に触れたり、激動の社会を生き抜く再学習の場としてある。	自然などの外的環境との「感覚器を介した体験（外的体験）」と、個々人が事象を捉える「現象学的な体験（内的体験）」の両者の体験が期待されている。

註

1) ここで用いている「学習者」とは、プログラムを受ける側という意味である。具体的には、参加者、学生、クライエント、依頼者、患者、キャンパーなどを指す。

2) ここで用いている「指導者」とは、プログラムを提供する側という意味である。具体的には、指導者、教員、カウンセラー、相談員、セラピスト、ファリシテーター、コーチ、リーダーなどを指す。

表2. 教育・治療構造の比較表B

大区分	中区分	環境療法	作業療法	野外教育プログラム
概要		原因を個体と環境とのやりとりの中に見いだし、環境を変化させることで、行動を変容や成長を促そうとする方法。広義の意味では、カウンセリング、エンカウンターグループ、作業療法、野外教育プログラム、組織キャンプなどのすべてが当てはまると言える。	心理的問題に対しては、人間の行動力やエネルギーを、作業という有意義な活動に発散させ、結果的に鎮静をはかりながら、望ましい方向に変容を促そうとする方法。また、機能的問題に対しては、主に身体障害者のリハビリテーションの一つとして、社会生活に適応する能力を回復させることを目的とする方法。	表1.参照
外的な構造	「環境」の意味合い	日常と異なる環境	―	「日常と異なる環境」に内包される意味は、以下の水準に分類することできる。 ①日常と「習慣」が異なる ②日常と関わる「人間」が異なる ③日常と「空間」が異なる ④日常から物理的に離れた「遠隔地」である ⑤「自然環境」の中で行われる
	「作業」の意味合い	―	特定の作業を取り扱う	「特定の作業を取り扱う」に内包される意味は、以下の水準に分類することができる。 ①原始的な「食事作り」の作業 ②原始的な「（テント等の）宿泊生活」の作業 ③「身支度等の日常的」な作業 ④「地球の自転周期」に合わせた起床就寝等の作業 ⑤「直接対面対話」を要するコミュニケーションの作業
内的な構造		「環境」という外的構造の設定を重視しつつも、治療者（指導者）の存在や関係性などは、必然的に結果に大きく影響する。	クライエント（学習者）が、「作業」という外的構造にコミットしていくこと自体に教育・治療的効果がある。また、「作業」という外的構造にコミットしていく重要な要素は、治療者（指導者）の存在や関係性などである。	「環境」という外的構造の設定を前提として、「作業」という外的構造に、「自然」にコミットさせていくこと[1]で、教育・治療的効果を高めている。また、野外教育プログラムの「環境」「作業」の二つの外的構造は、いずれも「自然」という変数を内在させているため、統制困難であり、「内的構造」としての側面を持つ。

註

1) 「『環境』という外的構造の設定を前提として、『作業』という外的構造に、『自然』にコミットさせていくこと」とは、いわば「Natural Settingをしている」と言い換えることができる。

＜引用文献＞

①天貝 由美子、高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響、教育心理学研究、43、1995、11-18
②内田 遼介、町田 萌、土屋 裕睦、釘原 直樹、スポーツ集合的効力感尺度の改訂・邦訳と構

成概念妥当性の検討、体育学研究、59、2014、841-854
③阿部 美帆、今野 裕之、状態自尊感情尺度の作成の試み、パーソナリティ研究、14(1)、2005、125-126

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計２件）

① 坂谷 充、渡邉 仁、福富 優、佐藤 冬果、組織キャンプのプログラム効果-南会津チャレンジキャンプの実践を事例として-、キャンプ研究、査読無、22巻、2019、19-25
② 渡邉 仁, 飯野 亜耶奈、「東北の高校生の富士登山」に関する調査研究-状態自尊感情の変化-（速報版）、東北の高校生の富士登山2018報告書、査読無、2018、28

〔学会発表〕（計８件）

① 東海林 毅、渡邉 仁、飯田 義明、佐々木 亮太、野外活動プログラムがチームの組織力（チームビルディング）向上に与える影響の検討-関東リーグ１部昇格を目指すR大学サッカー部を事例として-、日本フットボール学会第16回大会、2018年12月24日、順天堂大学さくらキャンパス（千葉県印西市）
② 渡邉 仁、機能的類縁プログラムを基軸とした野外教育プログラムの教育・治療構造の検討、日本野外教育学会大21回大会、2018年6月24日、信州大学（長野県長野市）
③ 坂本 昭裕、竹内 靖子、渡邉 仁、吉松 梓、向後 佑香、坂谷 充、野外教育における心理臨床的アプローチ-発達障害の子どもとその保護者が参加するキャンプの事例から-、日本野外教育学会第21回大会、2018年6月24日、信州大学（長野県長野市）
④ Sato, F. Watanabe, H. Imura, H. Ozaki, T. :Autobiographical Memories of an Outdoor Education Program for Associates Training: Exploring Narratives and Memory Characteristics. 6th Asia Oceania Camping Congress, Tokyo, 2016-10.
⑤ 谷中 理矩、佐藤 冬果、渡邉 仁、参加児童生徒のもつ組織キャンプ経験の自伝的記憶-自伝的推論に着目して-、第22回日本キャンプミーティング、2018年6月9日、国立オリンピック記念青少年総合センター（東京都渋谷区）
⑥ 佐藤 冬果、渡邉 仁、井村 仁、尾崎 智哉、社員研修としての野外教育プログラムに関する自伝的記憶、日本野外教育学会第19回大会、2016年10月16日、中央青少年交流の家（静岡県御殿場市）
⑦ 坂本 昭裕、大友 あかね、渡邉 仁、吉松 梓、向後 佑香、坂谷 充、野外教育における心理臨床的アプローチ-発達障害の子どもの社会化と個性化-. 2016年10月16日、中央青少年交流の家（静岡県御殿場市）
⑧ 吉沢 直、渡邉 仁、オフザピッチトレーニングとしての雪上野外研修プログラムの実践、第20回日本キャンプミーティング、2016年6月4日、国立オリンピック記念青少年総合センター（東京都渋谷区）

６．研究組織

(1)研究協力者

研究協力者氏名：坂谷 充
ローマ字氏名：(SAKATANI, mitsuru)

研究協力者氏名：東海林 毅
ローマ字氏名：(TOUKAIRIN, takeshi)

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。